

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 13 日現在

機関番号：64401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2013～2016

課題番号：25370959

研究課題名（和文）トランスナショナルな社会運動と政治参加の人類学：オセアニア大国の移民を事例に

研究課題名（英文）The Anthropology of Transnational Social Movements and Political Engagement:  
Migrant Communities in Oceania

研究代表者

丹羽 典生 (Niwa, Norio)

国立民族学博物館・研究戦略センター・准教授

研究者番号：60510146

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、本国へと影響を与える移民コミュニティの社会運動にとくに焦点を当てつつ、グローバル化された社会におけるトランスナショナルな社会運動の特質を浮き彫りにすることを目的とした。事例としてはオセアニアを扱った。主たる成果としては、オセアニア大国（ニュージーランド、オーストラリア）におけるオセアニア移民の状況と社会運動に関する新しい資料を発掘・収集し、その特質の一端を検討することができた。また、紛争を起点としてグローバルな影響関係で揺れ動くオセアニア諸社会を扱った編著を刊行した。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to highlight the nature of transnational social movements in a globalized society, with particular emphasis on the social movement of immigrant communities that influence the home country. As a major result, I can gather information on the situation of various immigrant communities and examine a part of their characteristics of their social movements in New Zealand and Australia. In addition, I have edited a book to analyse how people have affected by global network from case studies of various conflicts in pacific societies.

研究分野：社会人類学

キーワード：社会運動 紛争 トランスナショナル 少数民族 移民 オセアニア 支援

### 1. 研究開始当初の背景

1980年代以降、グローバル化の影響から国家の役割が再編されるなか、新たな公共性や政治のあり方が激しく問われている。別言すれば、間接民主主義の問題点が噴出する中、新たな政治参加の形態を模索するという意味で、社会運動の意義を再検討する必要性が認識されつつある。参加型民主主義や社会運動など政治参加の形態が議論され、社会関係資本の重要性に焦点があたり、さらには思想としてのアナーキズムのあり方が批判的に問い返されるようになってきているのは、そうした時代の流れを反映してのことであると考えられる。

研究代表者はこれまでオセアニアのフィジーを主な調査地としてその宗教的運動や独立以降の紛争をはじめとする政治的安定性の問題について、オセアニアという比較の枠組みで検討してきた。そうしたなか気づかされたのは、国の内部にだけ焦点を当てることの限界と、在外コミュニティの存在感の増大である。従来のオセアニア研究で指摘されてきた送金の影響だけでなく、ことに政治的な文脈における彼らの存在感に留意する必要性がある。

たとえば、1980年代後半よりフィジーは、定期的に起きるクーデタなどの政治的問題から、大量の移民を近隣の大国であるオーストラリア、ニュージーランド(ここでは、この二国をオセアニア大国と表記する)さらにはアメリカ西海岸に輩出している。彼ら移民コミュニティは、正確な統計は存在していないものの、送金や海外での政治的活動を通じて本国にも多大なる影響を与えている。本国側もたとえば紛争後の憲法改正の際に在外コミュニティの意見を積極的に求めることまで行っている。

背景にはオセアニアの島嶼国では、国によっては人口の3割を在外集団が占めるという、いわばネットワークで形成された社会となっているという点がある。本研究では、なかでも、本国へと影響を与える移民コミュニティの社会運動、移民先でのデモ行進、新たなメディアを利用した政治的意見の発信、在外コミュニティとしての本国の政治過程への参加などに焦点を当てつつ、グローバル化された社会におけるトランスナショナルな政治的関わり方の特質を浮き彫りにする。

### 2. 研究の目的

本研究は、第三世界における社会運動の特質の一端を、オセアニアをフィールドとして解明することを目的としている。

オセアニアにおいては、植民地時代の宗教的・反植民地的運動、プロトナショナリズム運動の時代を経て、1980年代後半以降グローバル化の影響のもと、暴動から民族紛争、クーデタが生起する中で様々な政治的な社会運動が再度活性化している。

本研究では、理論的には1980年代以降の新たな社会運動、参加型民主主義の研究、事例としては移民コミュニティと宗教復興やナショナリズムとの相関関係に関する研究を念頭に置きつつ、人類学的な民族誌的記述分析を通じて、社会運動に関する文化人類学的考察を行う。

### 3. 研究の方法

本研究は、オーストラリア、ニュージーランドを中心とする移民受け入れ国における文献調査と関係者へのインタビューを通じて遂行する。また、移民排出国であるフィジーにおける現地調査と文献調査を併せて敢行する。

各種の文献は、公文書館における政府関係文書から大学図書館における専門図書までを対象として収集・閲覧のうえ読解する。聞き取り調査は、移民ともかかわりのある研究者や政府関係者から、移民コミュニティの特定の人物とコンタクトを取りながら、対象を雪だるま式に拡大して行う。

4年の研究期間のあいだに、順次、既存文献の収集読解、あらたな史資料の発掘、現地調査、関係研究者との情報交換などをおこなった。さらに必要性に応じて、史資料調査と現地調査を往還して遂行した。

### 4. 研究成果

研究成果としては、以下の文献調査、現地調査を遂行することができ、それを踏まえて、関係する主要な研究成果としては、編著1冊、論文5件、学会発表を9件(うち2件は、オセアニアと人類学に関するそれぞれの国際学会)のほか、20件程度の短い文章を発表した。

#### (1) 文献調査及び研究ネットワークの構築

イギリスの国立公文書館、フィジーの南太平洋大学図書館及び、オーストラリアにおけるオーストラリア国立大学図書館、国立図書館、国立古文書館、移民資料館に所蔵が確認されているオセアニアの移民と少数民族またフィジーに関係する資料の調査を遂行した。

ことに先住系のひとびとが、クーデタを契機にどのような組織を形成して、活動を行っていたのかを知ることができる文書をまとめて閲覧できたため、人々の政治参加の形が見えてきた。同時に、フィジーにおいて共産党を設立した人物が、本国を離れてからいかなる活動をしていたのかを傍証する歴史から埋もれていた資料も発掘できた。先住系以外の少数民族の国際的な社会運動の展開に関する資料も見つけることができた。

研究ネットワークの構築と研究成果の交際の発信のために、ガイド・ピグリアスコとマット・トムリンソンが主催するオセアニア社会人類学会(ASAO: Association for Social Anthropology in Oceania)における

パネル、人類学会の国際学会（IUAES：International Union of Anthropological and Ethnological Sciences）にてニコ・ベズニエとスーザン・ナロツキーによるパネルに参加して発表を行った。またそれぞれの学会での活動を通じて研究者と情報交換と将来的な共同研究のための打ち合わせを行った。ここで話し合われた内容にかかわるパネルを将来組織することも検討している。

## （２）現地調査

オーストラリアの各都市（メルボルン、キャンベラ、ブリスベン、アデレード）、ニュージーランドの首都オークランド近郊及びフィジーを中心に現地調査を行った。本研究の調査・成果公開を通じて得られた具体的な知見としては以下の項目を挙げることができる。

オーストラリアにおいては、国レベルの移民政策の変遷に関する先行研究が手厚く存在している。オセアニアからの移民についても、そうした国の政策の変遷と移民の集団の属性（出身国、民族、時代、階層など）の一連の変化の流れの中に位置づけて捉えたほうがよいということが明確になった。

またオセアニア大国は先住民による社会運動が盛んな地域として知られているが、同時に、現時点のそれぞれの都市部においては、多民族的な催しが開催されたり、移民資料館が設立されていたりした。そうしたもともと外来の移民であった集団をローカル社会の成員として確立をさせ、彼らに関する最低限の情報の収集・公開を行うと同時に、彼らを包摂する社会の構築に向けた試みがなされていることが分かった。

オーストラリアへのフィジーを中心とする移民については基礎的なデータを一部入手することができた。データで検証できる段階ではないが、研究代表者の観察では、ニュージーランドでも似たような傾向があるがより民間の自発的な活動に依存しており、オーストラリアほど包括的でもなく、組織的な補助がみあたらなかった。

本国との関係についてしてみると、移民のネットワークの形成状態については、民族ごとに傾向の違いがうかがえた。アジア系に比して、オセアニア系は、移民時期が比較的近年であることもあってか、本国との接触は頻繁で、別言すると移民先への定着（たとえば公的部門への社会的進出など）はまだ不十分である。

また移民のトランスナショナルな移動と民族的アイデンティティの表出という観点からみると、政治参加や社会運動にまつわる動員では政治的な接点が重視されるが、移民コミュニティによる民族的感情の表出という意味では、それにもましてスポーツなどの各種のイベントなどにおける機会が人々の集合の結節点としてむしろ重要となっている点なども、今後の検討すべき対象である

と思われた。

本研究を進行中に着想を得て、現代文化のなかにおける政治、スポーツなどの場における対抗的アイデンティティの表出と民族的属性の関わりを比較検討の対象に含んだ共同研究プロジェクトを2015年度から進めている（国立民族学博物館・共同研究会（『応援の人類学 政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の比較民族誌』）。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 5 件)

丹羽典生 2017 「鯨歯を纏い、豚を屠る  
フィジーにおけるヴァヌアツ系フィジー人の自己形成の視点からみた共存」風間計博（編）『交錯と共生の人類学 オセアニアにおけるマイノリティと主流社会』ナカニシヤ書店、pp35-54

丹羽典生 2016 「コメント：パフォーマンスを通じた伝統知識の教授 フィジーの「天地創造」劇の活動から見た雑感」上羽陽子、中牧弘允、中山京子、藤原孝章、森茂岳雄（編）『国立民族学博物館調査報告 No.138 学校と博物館でつくる 国際理解教育のワークショップ』：100-101

丹羽典生 2016 「ヴァス論再考 フィジーにおけるある贈与関係の変遷」岸上伸啓（編）『贈与論再考 人間はなぜ他者に与えるのか』臨川書店、pp143-160

丹羽典生 2016 「イノセンスの終焉にてオセアニアにおける〈紛争〉の比較民族誌的研究にむけて」丹羽典生（編）『〈紛争〉の比較民族誌 グローバル化におけるオセアニアの暴力・民族対立・政治的混乱』春風社、pp1-40

丹羽典生 2016 「分裂と統合のはざままで フィジーにおける 2000 年クーデタと西部政体の樹立運動」丹羽典生（編）『〈紛争〉の比較民族誌 グローバル化におけるオセアニアの暴力・民族対立・政治的混乱』春風社、pp205-238

〔学会発表〕(計 9 件)

丹羽典生 2016 「ヴァス論再考 フィジーにおける贈与関係の変遷」『第 50 回日本文化人類学会』5月29日 南山大学。

丹羽典生 2015 「消えた日本人移民 19 世紀フィジーにおける実験とその記録」『日本オセアニア学会』3月27日 田沢湖公民館大集会室、秋田。

丹羽典生 2015 「神学と宗教的社会運動  
フィジー・ダク村落開発事業の事例から」『宗教の開発実践と公共性に関する人類学的研究』(代表者:石森大知)2月28日 国立民族学博物館。

丹羽典生 2015 「ヴァヌアツ人としての自己形成 フィジーにおけるヴァヌアツ移民を事例として」『科学研究費補助金「太平洋島嶼部におけるマイノリティと主流社会の共存に関する人類学的研究」研究会』2月23日 京都大学。

丹羽典生 2014 "Accommodating Political Crisis: the Perspective of Ethnic Minorities in Fiji" Panel 'Crisis as Ongoing Reality: Perspectives from Different Anthropological Locations' (Covenor: Niko Besnier, Susana Narotzky), May 5, IUAES 2014 with JASCA, Makuhari Messe, Chiba, Japan.

丹羽典生 2014 「辺境からみるグローバル化 フィジー・ヴァヌアツ移民の位置性と戦略」『日本オセアニア学会』3月22日 高知県国民宿舎桂浜。

丹羽典生 2014 「宮本善十郎は何を見たか 消えた日本人移民からみた記憶と記録」『科学研究費補助金「太平洋島嶼部におけるマイノリティと主流社会の共存に関する人類学的研究」研究会』2月15日 京都大学。

丹羽典生 2014 "Ethnographic Research and Written Fijian Testimonies: From Studies of Social Movements around 1950" ASSOCIATION FOR SOCIAL ANTHROPOLOGY IN OCEANIA, (Covenor: Guido Pigliasio, Matt Tomlinson) February 8, Kona Hawaii, United States of America.

丹羽典生 2013 「ヴァス論再考 母方交叉イトコ婚からみた集団間関係の変容」『贈与論再考:「贈与」・「交換」・「分配」に関する学際的比較研究』(代表者:岸上伸啓)7月6日 国立民族学博物館。

〔図書〕(計 1 件)

丹羽典生(編) 2016 『<紛争>の比較民族誌 グローバル化におけるオセアニアの暴力・民族対立・政治的混乱』春風社、全368頁

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.minpaku.ac.jp/research/activity/organization/staff/niwa/index>

新聞掲載情報

丹羽典生 2016 「先住民族を知ろう フィジー」『朝日小学生新聞』11月28日

丹羽典生 2015 「信じる(2) 出会った意味」『毎日新聞』夕刊1月29日

丹羽典生 2014 「みんなく世界の旅 フィジー(4)」『毎日小学生新聞』8月2日

丹羽典生 2014 「生き物(6) いつかは行きたいイノシシ猟」『毎日新聞』夕刊7月10日

丹羽典生 2014 「みんなく世界の旅 フィジー(3)」『毎日小学生新聞』7月26日

丹羽典生 2014 「みんなく世界の旅 フィジー(2)」『毎日小学生新聞』7月19日

丹羽典生 2014 「みんなく世界の旅 フィジー(1)」『毎日小学生新聞』7月12日

その他

丹羽典生 2016 「新刊紹介 <紛争>の比較民族誌 グローバル化におけるオセアニアの暴力・民族対立・政治的混乱」『日本オセアニア学会 NEWSLETTER』第116号、21-22頁。

丹羽典生 2016 「出版物 <紛争>の比較民族誌 グローバル化におけるオセアニアの暴力・民族対立・政治的混乱」『民博通信』154、23頁。

丹羽典生 2016 「みんなのはくぶつかん みんなく 網の文化の継承者 イヴォンヌ・クールメイトリーさん、レッド・オーカー賞受賞」『月刊みんなく』9月号、表紙裏。

丹羽典生 2016 ジョン・カーティ(丹羽典生訳)「ワンロードを巡る旅」『月刊みんなく』6月号、4-5頁。

丹羽典生 2016 「ワンロードからみたアボリジニ・アートとオーストラリアの変貌」『月刊みんなく』6月号、2-3頁。

丹羽典生 2016 「砂漠の一本道から生み出されたオーストラリア・アボリジニの芸術」みんなく e-news180号。

丹羽典生 2014 「民主制への復帰か、さらなる混乱の序章か フィジーにおける8年ぶりの総選挙の帰結」『国際人権ひろば』118、12-13頁。

丹羽典生 2014 「植民地文学」国立民族学博物館(編)『世界民族百科事典』丸善

出版、502-503 頁。

丹羽典生 2014 「World Watching from Hiroshima 忘れられた日本人移民」『みんぱく e-news』152

丹羽典生 2014 「現代オセアニアの<紛争> 脱植民地期以降のフィールドから」『日本オセアニア学会ニューズレター』107、28 頁。

丹羽典生 2013 「世界の武器」『月刊みんぱく』10月号、10-11 頁。

丹羽典生 2013 「現代オセアニアの<紛争> 脱植民地期以降のフィールドから」『民博通信』141、25 頁。

丹羽典生 2013 "Cargo Cults and Contemporary Conflicts in Pacific Societies: Seeking a Path of Coexistence in the Age of Globalization." MINPAKU Anthropology Newsletter 36:12.

丹羽典生 2013 「騙される人類学者」『月刊みんぱく』4月号、5頁。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

丹羽 典生 (NIWA NORIO)

国立民族学博物館・研究戦略センター・准教授

研究者番号：60510146

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし

### (4) 研究協力者

なし